経済・産業・実務シリーズ

「歴史の終焉」のあとの不確実な時代について考える〔後編〕
—“リベラルな国際秩序”が直面する諸困難にどう立ち向かうか—

旭　　英　昭

目　　次

（前編：2018年10月号に掲載［57～69頁］）
1．はじめに：「歴史の終焉」の意味するもの
2．“リベラルな国際秩序”は、神話か（？）
3．“グローバル化の象”の“勝者”と“敗者”
4．なぜ、“民主主義の後退”は起きたのか
（後編）
5．“忘れられた人々”とポピュリズムの沸騰
6．大国化する中国と“新しい発展モデル”
7．むすび：空洞化した中産階層の復活の処方箋とは

就任から1年半たつトランプ大統領は、景気回復の波に乗り、大型減税、規制緩和、保護貿易、移民政策を通して、中核的支持層の白人労働者のみならず、共和党多数の支持をつなぎ留める。しかし、ポピュリスト的な政治手法には徐々にほころびがみえはじめ、2018年秋の中間選挙では、大統領としての資質や適格性が争点として浮上する。同時に、“社会主義”的な政策への傾斜と黒人、女性の進出が目立つ民主党の旋風（blue wave）が注目される。また、グレアム・アリソンやフランシス・フクヤマからは、米中衝突の回避、疲弊する民主主義の正常化という、今日の米国が真正面から取り組むべき課題についての提言が聞こえる。

5．“忘れられた人々”とポピュリズムの沸騰

〔今日のポピュリズム—三つの特徴〕

将来の民主主義にとっての脅威となり、また、従来の権威主義体制からのそれとも明らかに異なる、フランシス・フクヤマが命名する“ポピュリズム的ナショナリズム”が勢いを増している(注1)。それは、「内部から勃興する“大衆的”な熱情で動かされた“反自由主義的”な政治勢力によって、確立された民主主義体制が屈服させられる」現象である。“非リベラル民主主義”なる用語を最初に使用したのはファリード・ザカリアだが(注2)、オランダ人学者のカス・ムッダの言葉を借りれば、西側諸国でみられるポピュリズムは、“非民主的リベラリズムに対する非リベラルで民主的な対応(注3)”ということになる。

ポピュリズムについてはもともと学者の間で合

旭　英昭（あさひ　ひであき）
日本国際問題研究所客員研究員。前東京大学教授。著作に『平和構築論を再構築する　増補改訂』（日本評論社、2015）の他、寄稿論文に、“State, Society, and Sociel Capital,” *Journal of Human Security Studies*, Autumn 2016; “A Successful Model or an Uneasy Future for Peacebuilding,” *Asian Journal of Peacebuilding*, May 2017;「Zからの“秘められた”メッセージ［前編］［後編］」、『証券アナリストジャーナル』2017年10－11月号等。